

## 技術教育研究会と私の歩み

10

佐々木 享

### そりが合わない

原正敏先生の話が続ける。先生が北海道大学に転任される際に、ある晩、親しい友人たちと先生を囲む会を開いたことがあった。その席で、和田典子さんは、「原さんと佐々木さんの共同がうまく行くのは、二人の性格が似ているからではなくて、本当は二人のそりが合わないからなのよ」と言われた。そういわれてみると、原正敏先生はこれは重要だと考えると徹底して追求されるのに、私はあっさり転進したりすることが多いので、原正敏先生からたしなめられたことも一再でなかったし、私は大抵おおまかで、お世辞にも緻密さという点での共通性があったとはいえない。原先生には私のこうした弱点をカバーしながら討論して下さる度量があったから、共同が成り立ったのであろう。

### 技術教育研究会の事務局長となる

北海道大学へ転任した原正敏氏に替わって、1970年8月に宮城県の鳴子温泉で開催された第3回全国大会の際に開かれた総会において、私が事務局長に選出された。当時の技術教育研究会は小さな地域サークル程度の規模だったし、運営委員会も十分には機能していない時期であったから、私がお引き受けしたのは止むを得なかったように思う。

### 技術教育研究会の規約等の整備

この総会で、技術教育研究会の規約が整備された。技教研は、当時すでに民間教育研究団体連絡会（民教連）に加盟していた。し

たがって実質的にも全国的な団体であることを明確にするために、会の規約などを整備する必要がある、というのが直接の契機だった。

しかし実態からいえば、それまでの技術教育研究会の会員は、東北北教研に結集していた少数の仲間をのぞき、大部分は東京とその近辺に在住する人びとに限定されていた。率直に言えば、原正敏氏が積極的な会員拡大方針をとっていなかったからだと思われた。私たちの判断では、教育研究者たちが技術教育に手をさしのべてくれることは殆どなかったし、他方で技術教育や職業教育、職業訓練の分野には討論すべき課題が山積していた。したがって、技術教育や職業教育を討論する場が提供されることを期待している人びとは全国に多数存在しているに違いないと思われた。そういう期待に応え得るように組織を整備したいと考えたのである。こうして、現在に続いている会の規約（の骨格）ができた。私もその制定過程に参画した教育科学研究会（教科研）の規約などを参考にしたが、研究会の活動目的など肝心な要点のみを掲げ、実務的な面はできるだけ簡単なものにした。たとえば会計監査についても、年間予算が100万円以内という程度の小規模だったら置かなくてもよいのでは、という商教協の人の助言で、当初は置かなかった。

### 技術教育研究会の活動は教育基本法の問題で

技教研の活動目的は、規約により、「この会は、教育基本法の問題に基づいて、国民的立場からひろく技術教育の理論と実際を研究することを目的とする。」と規定された。

この規定が重要な意味をもつことは、後に明らかになる。すなわち民間教育研究運動の一部に、ソ連などの総合技術教育をめざそう、などという考え方が生まれ、一定の影響が生じた際に、「私たちがめざすべきは、日本における民主主義的な技術教育や職業訓練を発展させることであって、社会主義的な教育思想や教育制度ではない」ときっぱりと言い切ることができたのは、規約上に目的が明確にされていたからだった、と私は考える。

規約を整備するとともに、研究会の活動の大枠を「活動方針」として文書化した。現在の「活動方針」の原型である。これはいわば研究会の基本方針で、毎年の具体的な活動目標としては、「活動方針」とは別に「活動計画」を掲げることにした。

#### 再編当初の役員構成

1970年に組織を再編強化した時の最初の役員は、以下の通りである。

代表委員：長谷川淳

常任委員：原正敏 高橋豪一 幡野憲正 山脇与平 佐々木享

委員：阿部司 内田謙三 亀田光三 河野善市 外崎文夫 川瀬勝也 田川文夫 長谷川淳、原正敏両先生以外の人につき少く説明を加えると、幡野憲正氏は技教研創立以来の会員で、当時は都立向島工業高校の定時制に在職しておられた。高橋豪一氏は、前述のように宮城県の活動家で技術科の教師であった。東京以外なのに常任委員に名を列ねておられたのは、それだけ熱心に技教研の運動を支持して下さっていたからである。

委員（通称は全国委員）の阿部司（岩手）、内田謙三（山形）、河野善市（福島）、外崎文夫（青森）の諸氏はいずれも東北民研の活動家たちである。いま京都の同志社中学校にいる川瀬勝也氏は、東京学芸大学を卒業したばかりの一時期川崎の中学校に勤めておられた。この組織改組の時期にはすでに同志社へ転任

しておられたのかも知れない。以上の方々はみな技術科の教師だった。亀田光三氏だけは群馬県の工業高校の教師で、技術史に造詣が深い人であった。また田川文夫は長崎県の技術科の活動家で、初めてお目にかかったのは日教組の教研全国集会だったと記憶する。

#### 山脇与平氏のこと

この時に常任委員になって下さった山脇与平氏も古くからの会員であった。私が目黒六中に在職していた頃と同じ職場で働いていた時からのお知り合いで、当時は数学を担当しておられた。1960年代の初めに東京都立世田谷工業高校に附属中学校を設置し6年一貫の技術教育を行う構想が持ち上がった際に、熱血漢タイプの山脇氏はその趣旨に賛同され、すすんでこの世田谷工業高校附属中学校に技術科の教師として赴任された。山脇氏は、海軍兵学校最後の学生で、戦後に横浜工専（後の横浜国立大学工学部）の機械科を卒業しておられ、数学よりも技術の教師として生きたいと考えられたのであろう。その後いくつかの職場を経て、技教研の組織改組の頃は、高知高専から埼玉大学教育学部に赴任して来られたばかりで、事務局の仕事も熱心に手伝って下さった。この時期の技教研の『常任委員会ニュース』には、山脇氏が謄写版で印刷して下さったものが多い。同氏は非常な情熱家で、いわゆる要領のよい人が多いこの世ではとかく誤解を招きがちなところがあった。

山脇氏とはその他の点でもご縁があった。後年に私が名古屋大学に赴任した際に、それまで私が担当していた神奈川大学の「技術論」の講義を山脇氏が引継いで下さったのである。後年の同氏の『技術論と技術教育』や『社会と教育と技術論』には、ここでの講義が生かされたのであろうと思われる。

頑健そうに見えたけれども、病气されることが多く、惜しいことに、奈良教育大学に赴任して間もなく亡くなられた。（続く）